
バカとテストと英霊達

御根通久

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストと英霊達

【Nコード】

N4422BA

【作者名】

御根通久

【あらすじ】

明久は幼少の頃より自分を守護する英霊の存在を知っていた。だけど、その事は誰も信じてなどいなかった……それでも明久は馬鹿にされる事を知っていても英霊達を嫌わず、まっすぐ生き続け、征服王と英雄王の教育（！！！？）を受け、のびのびと成長し続けて文月学園に入学し、試験召喚戦争でFクラス代表となって全てのクラスを征服するという野望を持っていた……だがしかし、運命は明久にFクラスに入るなと拒絶したのである。これは、英霊達と明久による試験召喚戦争での物語である。

明久×姫路・明久×島田は確実に無い上に姫路と島田は酷い目に合う可能性が高いです。Fateシリーズとクロスしてますが世界観はバカテスのまま。

後は、表立って動く転生者とモブ転生者が複数いますので注意してください。

プロローグ（前書き）

.....なかなか筆が進まないのもまた気分転換に書いて溜
まったものを

投下いたします。

こういうことをやってるから物語が進まないんですよー.....

バカとテストと英霊達、よければ楽しんでいてください

プロローグ

「なんと仰られましたか？」

「何、今度君の担当する世界に20人の人間を転生させるから調整よろしく、と言っただけだが」

いくつものコンピューターが並んでいる室内で、一人の男性が別の男性に呼ばれ、話を聞いていたのだが、出てきた内容に目が点となったのである。椅子に座っている方の男性はその反応を予測できてはいたので、特に咎めは

しなかったのである。

男の後ろに並んでいる数人の男は、その数のおおさに目が点となっており、

下手したら自分達もそうなる可能性が高いのではないかという不安で顔が

青くなっていた。

「いやいや、4・5人ぐらいなら結構話は聞きますけど………何がどうして

そんな人数を送り込む事態になるんですか！！？」

「仕方がないだろう、時期が重なってちょうど空きがあるのが君の担当

世界軸しか空いてなかったのだから……君のところに資料は転送しておくから

さっさと作業に取り掛かってくれたまえ………まだまだ仕事

あるんだ」

椅子に座っている男の言葉に、そういえばこの人休み取ってないんだったと

思い出しつつ、仕方なく渋々と引き下がった。

自分のところではほぼ休みをとり放題だったので、その分のツケが来たのだと

納得させながら。

《君のところは5000人だ》

《

え?》

瞬間、室内の時間が停止した。

他に作業をやっていて話を聞いてなかったはずのものも、20人で頭を

痛めていた者も、後ろに並んでいたものも同様に止まった。

《ちよちよちよーっと待つてくださいよ!!!?確かに多いことは

理解してますけど、100人を超えることはなかったじゃないですか!!!?》

いくら人気の世界観とはいえ100人は異常ではあるのだが、5000という

数字の前には霞んで見えてしまう。

男はその男の運の悪さに涙しつつ、自分の担当を完了させるために席に戻った。

《ほかの課だと万単位が出たからまだマシだ……》

《その人大丈夫！！！？》

残業とかそういうレベルを遥かに超えてる地獄のような言葉に部屋に居た人物は
全員涙して、後で差し入れを用意してやろつと誓っていた。

*

「なんだ、こりゃ」

いざ、20人に欲しがっている能力付与して送り込もうという段階で……

不可思議な要求が多々あった。

一応可能ではあることなのだが、わざわざ自分では無く他人に対して能力を

付与しているという異質な点だ。

「おまけに登場人物を増やすためにわざわざ能力要求してる奴が

……
何考えてんだこいつら」

確かにこれ以上はないほどに影響を受けまくっており、しかも他者に能力付与した

者の全員が、原作主人公無双を見たいというある意味全部投げてる要求なのだ。

何故だか、原作破壊を目指してハーレムを目指そうとする奴よりもタチが悪い。

「まあ、いいか。とりあえず仕事仕事」

要求通りに、本来居ないはずの人間を転生させ、願った人物を存在させ、

世界観的にはギリギリありえるがおりえない能力を与えて作業を終えた。

こういう単純作業を繰り返していると他の世界からの転生者の存在は割と

ありがたいものである……何故ならば、転生者の存在が無ければ完全に

マニュアル通りに進めていくだけであり、単純作業にしかないのだ。

とはいえ、送り込んでいる奴らは担当人数を減らしたいが為に行なっているだけなので、男は感謝などしない。

「えーっと、この人物をつくりあげて……この人物に英霊の付与

見事に被ってないな……ちょうど7だから勝手にクラス設定しておくか。

で、一応コイツの対策の為にこの英霊との絆補正を増やして、この人物が

付与対象に興味を抱くように設定して、と」

そこまで打ち込み、後は転生者のデータを纏めて要望通りに改竄するだけである。

全員容姿が似たようなものであり、名前もちよつと疑問に思うしか無いのが
多々あるが、今回だけではなかったのではや慣れている。

《主人公の兄とか妹とかになるやつが60人も居る――！！！！
！？一般人に

こんな数産めるわけないだろ！！？糞！年代指定してないから
なんとかバラバラに分散して 原作時期に0歳もいるけど
知らん！

原作に赤ん坊でなんとか関われこのやろー！！》

《《《なにそれこわい》》》

「それ以前に養えないだろそれ」

5000人転生のところはなかなか大変そうだった。

並行分散しても足りないといしか言いようがない。

割り振るまでは何を要求しているのかわからないのでああいふ状況
になりやすい。

文句は大元のシステムを作り上げた存在に言うしかないので誰も上
司に直談判を

行なったりしていない……………上司も確認と割り振りをしっかりと行
なっているし、

男たちよりもむしろ多く働いているのだ。

文句など言えるはずもない、というか言ってはダメである。

「さて、設定完了……………洗脳関係を要求した奴が居なくて何よりだ」

居たラ居たで面倒事しか引き起こさず、酷い結末にしか及ばなかったのだ。

好意を増幅させ、やりすぎて世界中の全員がその人物に対して病むほど心酔し、

死亡したと同時に自害したのだ……一斉に。

「ま、どのように動くかは楽しみだねー、他の世界から

「バカとテストと召喚獣」と呼ばれている世界は」

デフォルトの時間軸も同時に起動させて、違いを楽しみ始めた。

物語は始まりを告げる、この地点では登場人物が一人も存在せずに。

《なでボってなんだよ！！？なでボじゃないとか訳が分からないよ！！？》

《説明……なでた人物を熱血系に変化……燃やすんじゃないんかい！！？》

「後でVTR見せて！！？」

バカとテストと召喚獣の世界観で構成された物語が始まる

プロローグ（後書き）

当然のように不定期更新でございます。

あれ？主人公出てきてない！？……いえいえ、プロローグですから出てこないだけです。次の話からは我らが主人公が出てきます。

ちなみにハーレムにはならず、完全にオリキャラの単独ヒロインとなります。

明久に好意を抱いているものはいますが失恋は決定済みですー（ぶっちゃけた！？）。
では、また次回！

第一話：明久、クラス！？（前書き）

主要人物が出ていないプロローグだけというのもアレなので

追加で投下！

第一話：明久、クラス！？

『みんな、ぼくのいうことをしんじてくれないんだ』

ひとりの少年が何もない空間に向かって……誰かに話しかけているかのように

泣きながら喚く……親も友人も全ての者が少年の言っている事を否定しているのだ。

もっとも、虐めというわけではなく、ただの戯言としてしか認識されていないだけ。

それを虐めというのであれば虐めなのだろうが……まだ実体化が不安定な

この時では、英霊の存在は認知されないのである。
少年以外には見えないのだから。

『仕方があるまい、我等は坊主にしか見えぬからのう』

『人というのは見えぬものは信じぬものであるから仕方がない事だろう』

外には聞こえない声……少年にのみ聞こえる声が少年の耳に入り込む。

人のない事を確認し、頭のおかしい人物であると認識されないために最大限の

注意を払っている気配がするのだ。

もっとも、人の言葉を介している片方に対してもう片方は静かに知性のある音程で話している。

『にほんごでしゃべってよ、へらくねす』

『いや、喋ってるから』

明久と呼ばれた少年 吉井明久である がへらくねすと呼ばれた者に

対して話しかけていた。

圧倒的なまでの図体であり、幼い明久など軽く踏みつぶせそうである。

当然、この姿も明久以外にはまったく認識されていない。

ヘラクレス意外にも女性とも男性ともとれる声の高さの者が明久に
対して、

ツツコミを入れていた……とはいえヘラクレスが明久に対してわからない単語を

使ったことにも若干非がある。

ヘラクレスとはギリシャ神話の最大の英雄であり、ここに存在
しているのは

紛れも無く大英雄本人である。

『えるきどう……きんぴかのおうさまは？』

『誰が金^{アキヒサ}ぴかだ馬鹿、一応王として認識しているのは褒めてやる
が』

『まあまあ、落ち着けギルガメッシュ』

また異なる名前が出てきた。

淡い緑色の長髪を持つ男性にも女性にも取れる人形のような男性と
黄金の印象しか

感じ取れない黄金の髪に真紅の瞳を持つ男性。

人形のような男性はエルキドウ、黄金の王はギルガメッシュ、人類最古の英雄王の
唯一無二の友人とかつてひとつだった世界を手中に収めていた最強の英雄王である。

『明久、家に帰ってイスカンダルと一緒にゲームでもしたらいいと思うよ。』

今日は親御さんもお姉さんも帰ってこないんだから』

『よし、このあいだのりべんじだいすかんだる！』

『気が変わるのが早すぎだのう』

『それが、アキヒサ馬鹿の良きところであろっ』

最後の男は征服王と名高いイスカンダル……ヘラクレスには劣るが大柄な男であり、
赤い髪と赤い髭が特徴的な美丈夫である。

本来なら出逢う筈のない存在と邂逅を果たし、友好を深めている明久は認識されて

いれば、確実に世間から大注目を浴びるのだろうが、残念ながら、明久自身の

評価のせいで信用がされていないのだ。

それでも、その嘘と断言されていることを抜けば学校では中心となつて人気を

誇っていた、男子女子問わず恋愛感情には満たない好意を抱かれるほどに。

『つて、あれ？』

『どうしました？明久（また、あの子かな？）』

ふと、明久が視線を感じたのでそちらの方向へと視線を向けたのだが、そこには誰も居なかった。

否、居た事にかわりがなく、今でもいるのだが、明久の視線から逃れるように

隠れてしまっているだけだった。

もつとも、気配を察知できるエルキドゥにはあまり意味をもたらさないのだが。

しかし、あまり気にすることなくイスカンドルとのゲーム対決をいそいで行いたい

明久は気にすることなくさっさと走り去っていった。

『そういえば、今日の晩御飯は玉藻が作るみたいですよ』

『何！？急がば奴は稲荷寿司しかつくらぬではないか！！？』

エルキドゥの独白を聞いて、ギルガメッシュが急いで気配を遠ざかせる。

苦笑しながらもエルキドゥは親友のあとをついて行った。

ヘラクレスだけが視線を固定し続けていると、そこには銀色の髪をウェーブ状で

伸ばした少女がいた……明久に対して眩しく羨望を感じる視線を送りながら。

＊

数年近く時間は流れ、少年はまだ少年ではあるが幼さがなくなり、英雄達も存在が

明らかにはなっていないものの、明久と共に居続けている。

両親と姉はアメリカに行き、英霊達は実体化が限定的な場所で可能となり、

家の収入が異常なほどに増えた。

英霊達は数のほとんど留守番を任されているのが多いのだが、それでも

4人ほどが霊体化しつつも明久にくつついて行動を共にしている。

「おはようございます西村先生」

「おはよう吉井 待て貴様らまだ時間に余裕はある」

明久が到着し、校門の前に立っている体格のよい教員 西村教諭
に挨拶し、

挨拶を返されると、周囲にいた生徒が一斉に時間の確認をしつつ駆け始めていた。

明久の学園での評価は馬鹿、完全に馬鹿である。

それは、本人である明久も承知しているのだが 授業態度や登校などでは

ごく普通に遅刻もなく騒ぎもしない（自習は別だが、これは全員に言える）。

その事を真に把握しているのは、明久の目の前に居る西村教諭だけ

だろう。

事あるごとに殴っているのだが、その原因は100%明久に問題があるので、

別に虐めというわけではない、程度によっては暴力もない。

「まったく」

「多分、みんなりの冗談だと思いますよ？」

明久が苦笑しながら周りを見渡すと誰一人として視線を合わせなかった。

冗談ではなく、本当に遅刻の常習犯だと認識されていたらしい。

その事を理解した明久は、苦笑から乾いた笑いに変えて若干落ち込んだ。

確かに去年は完全な品行方正とは言い難い態度だったのだが、それは一緒に

つるんでいた人間も同様に言える 何故明久だけこういう理不

尽な評価を

受けるのかは不明なのだが、おそらく馬鹿ということで済まされているのだろうと

予測しつつ明久は幸せが逃げると理解しながらため息をついていた。

「まあ、お前の努力は知っているし。その内評価されるだろ」

「ありがとうイスカナル先生」

「誰だ!？」

『声が似とるだけだろう、坊主』

トライアスロンで優秀な成績を修めており、鉄人という呼び名であれば知っている

西村教諭だが、明久の口から出てきた人物に心当たり（名前だけなら知っているが）

がなく、ツツコミを入れていた。

そのツツコミにあわせるかのようにイスカンドルが明久にツツコミを入れる。

「すみません、知り合いとそっくりな声だったので」

「まあ、混乱してたのだろうから仕方がないが　ほら、クラス詳細表だ」

そう言つて、西村教諭は明久にクラス分けの紙が入った封書を渡す。明久にだけ感じ取れる気配がのぞき込もうとしているのを察知していた。

明久の思惑通りに進めているのかどうかの確認のためである。

（代表になれる筈、なんども確認して予測があつてれば）

『まあ、張り出されている成績をもとにこのぐらいであれば代表だと

確信が取れそうな点数にしぼったもんね』

そして、明久が封書を破って取り出した紙に書かれていた文字を確認し

吉井明久　Eクラス

思わず西村教諭の顔を見ていた。

「なん……だと……」

「去年まで馬鹿なのではないかと思っていたが、認識を改めんな。」

とはいえ、本来ならFクラスなんだがテスト中に途中退出した者が居てな。

その影響で繰り上がりになったんだ」

『そういえばどこかの教室で倒れる音が聞こえたよね』

明久と違う教室で試験を受けていた生徒が途中退出で0点扱いとなったようだ。

体調管理も試験のうちという鬼のような校則のせいで明久のおおになる野望が

軽く打ち砕かれた。

とはいえ、その生徒自身を責める気にはなれない……そういう事も含めて点数を

調整しなかった自分が悪いからである。

「Fクラス代表となってAクラスを征服するという野望が開始前にエンドロール。」

残り一年分は何を放映したらいいんですか……!?!?」

「知らん」

『試験召喚戦争が醍醐味なのだがのう』

試験召喚戦争はあくまでも、モチベーションを上げるための手段のひとつに過ぎない
試験召喚戦争とは、戦争の名がつくとおりの戦争であり、

実際に人間同士で殺し合いを行うわけではないが、科学とオカルトの奇妙な

融合によって偶然出来た召喚獣という自分自身の分身のようなものを用いて

戦い合わせる戦争である。

ちなみに試験という単語がついている理由が、召喚獣自体がテストの点数によって

能力が固定される為であり、能力によって勝敗がわかるひとつの要素であるため、

勉強ではなく、試験という単語で通称としているのである。

「Eも下位クラスだから試験戦争に意気込みを持っているに違いない！！

というか想定外だけど気にしない！代表じゃなくてもやりようはある！！」

「やる気は結構だが、クラスの面子で判断しておけよ」

*

「ここがAクラスか、学校にしては豪華すぎる」

『去年のクラスに比べればましな程度だな』

ギルガメッシュの意見はとりあえずスルーしつつ明久は最高クラスである

Aクラスの室内の概要を確認していた。

机に該当する部分はシステムデスクであり、ノートパソコン・個人用の冷蔵庫、場所ごとに気温を変化させることの可能な個人用の冷暖房器、システムデスクの

上にはお菓子がいくつか並べられており、いずれも高そうなものばかりだった。

おまけに広さは1学年で授業を行っていた教室の5倍もの広さである。

さらには恐ろしいことにAクラス専用の購買が後ろの方に陣取っていたのである。

休憩および泊り込み用の専用部屋や来客用の部屋まで存在していた。

『ええい、早急に試験召喚戦争を行わんのか。早く制圧したいのう』

征服が癖とはさすがは征服王というべきなのだろうか。

Aクラスに入っていた生徒の殆どが妙な寒気を覚えたらしくしきりに周囲を

見渡していたのは気のせいではないだろう。

ふと、明久が視線を感じたので視線のさきを見みると日本人形のような容姿の

少女がジッと明久を見つめていた。

少女は明久の親友である霧島翔子……とある事情から仲良くなつて、霧島の恋の

応援を明久がしている状態である。

今、視線を送ってきている理由は明久が眺めすぎている事に対して、ちよつと

気になつただけだろう

その証拠に、すぐに視線を手元の参考

書に持っていて

予習を始めていたからである。

「やつぱり霧島さんはAクラス……か」

悪意のない感情の視線だったためか、明久は先の視線でちよつぴり幸せな気分になつて浮かれていた……恋愛感情は無くてもあれだけの美少女に見

られたら幸せに

ならないはずがなにもちろん表情には出してはいないのだが、こんな光景を

長く付き合っている友人などが見たら確実にバレバレだろう。

少なくとも実体ではない三名の人物がニヤニヤと（一人は親友に便乗してるだけ）

明久を眺めていたからである。

が、ここで急に見下すような視線を感じてそちらへ顔を向けると鋭い視線で

明久を射抜いている一人の男子生徒が居た。

視線はニヤニヤして気持ち悪いと訴えていたのである……訂正、明久は結局デレデレ

していたようだった。

正論すぎて反論できないので明久は視線だけで謝って、その場を後にしていた。

その後、Bクラスの設備を見てみたが、購買・休憩室・接客室が無く、個人用では

ないが、公共の大型冷蔵庫が設置しており、個人用の冷暖房装置も付属、机は

システムデスク、椅子はリクライニングなのは一緒のようであり、教室の広さは

去年のクラスの3倍の広さである。

パソコンは共用のものがいくつか設置してあるのが見て取れた。

自動販売機が置いてあるのも特徴的だった……暖かい飲み物はあそこで

購入するのだろうか……ここから飲み物は料金ありだということは理解できた。

「一気に落ちるってわけじゃ無いんだねー」

Cクラスから冷暖房設備あり、共同の中型冷蔵庫有りにまで低下。

自動販売機もあったがBクラスは3台だったのに対して、こちらは2台だけだ。

教室設備は去年のクラスのものとはば代わり映えしないものになっている。

広さ的には去年のクラスの2倍と広さも少し落ちてきている。

『だんだん格差があるのが見て取れるね』

『この分では最低クラスはどこまで酷いのか気になるわい』

Dクラス、冷暖房設備有りで自販機なしの保管用らしき中型冷蔵庫。自動販売機も1台にまで減っていた。

教室の広さはCクラスと同じ広さで広さ的には大差は無いようだ。そして明久の所属するEクラスだが、冷暖房設備はあるもののスト

ーブと

扇風機だけしか見当たらない。

冷蔵庫や自動販売機は存在せず、教室の広さは去年のクラスと変化なし。

『普通の平均的教室ではあるのう』

『Fクラスは木造で昭和時代風の教室なのかな？』

「見に行ってみよう」

まだまだ時間は存在するので、明久は最低クラスであるFクラスの教室へと

足を運び始めていた。

余談だが、明久がEクラスの室内にはいり、席を確認してカバンを置いたことに

クラスメイトが目を見開いていた。

失礼ではあるのだが、明久は怒らず、必死にヘラクレスを抑えていた。

第一話：明久、クラス！？（後書き）

英霊達は基本的に明久に好意的です。

ではまた次回（〇・・〇）／

ヘラクレスに関して訂正……明久のチート具合が上昇しました

第二話：いきなり宣戦布告された？（前書き）

締切で追い詰めたら、何故かこっちの方が早く書き上がったでござる

Eクラス生徒はFクラス生徒と違って部活動優先ですので
FFF団のような組織は作られません……………が、少ししたら
健全な意味で妙な集団が出来上がります。

では、本編をどうぞ

第二話：いきなり宣戦布告された？

Fクラス教室の前に来て明久は驚きのあまり足が止まってしまった。

「戦時中にタイムスリップしたようだ、どうしよう」

『現実を見据えなさい明久……噂には聞いてたけどこれはひどいね』

『外観の地点でもはや入る気が失せた……Fクラスにならずに正解だったのではないか？馬鹿^{アキヒサ}』

ギルガメッシュの言うとおり、入らなくてよかった気がするという安心感と

途中退出した生徒に対する同情心が同時に明久を襲っていた。

「でも、きつと中はまともなはずだよ……仮にも学校なんだし」

『そうだね、試験校とはいっても勉強をするための機関なんだしひどい設備ではないはずだね』

外観で判断してはダメだと明久は自分に言い聞かせて、エルキドウの願望も

若干聞き入れて欲しいという願望と共に扉を開け放った。

「おはよう」

「とつとと座れ蛆虫やろう」

『ヘラクレスを止めて！！？』

『それが教師のセリフかあ！！』

『落ち着け！』

『ヘラクレス落ち着かぬか！！？』

強大な守護者がブチギレたことにギルガメッシュ・エルキドウの両名が止める側にまわり、イスカンダルも止められる側から止める側に回った。

明久は視線だけでそのハラハラ劇を見ており、先程の罵倒はスルーした。というか、ヘラクレスは沸点が低すぎる……過去の出来事から子供に対して愛着があるうえに、明久に対して好感度（家族的な意味で）が高いので。

「聞こえてねーのか、ああん？」

「…………雄二？」

Fクラスの教室の教卓の場所に居たのは明久の悪友である坂本雄二その人であった。

一応明久は言葉にしないで視線だけでなんとかそれ以上口を開かないで欲しいと頼み込んでおいたが、どこまで有効なのかはわからない。

「何をしてるのさ雄二」

「いや、せつかなんで担任の代わりに教卓に上がってみた。
代表にはなれなかったけどな」

罵倒の主が雄二であつた事を知ると、若干ヘラクレスも落ち着いてきた。

先生であるならまだしも友人であるなら罵倒とかはあるだろうという判断からくる

寛容さからである。

余談ではあるのだが、ヘラクレスが荒れ狂つた時に空気が震えて教室が若干揺れ、
殺気を浴びた者のほとんどが昏倒してしまったのである。

「急に寝た人が多いね、こんな室内で寝れるなんて凄いや」

明久のこんな室内発言は室内環境にある。

木造の机、椅子であるのは予想の範囲内なのだが、何故か床は畳という謎仕様。

おまけにところどころと穴があいていて空気が若干埃っぽい。

窓はひび割れどころかガラスがなく、すきま風は入り放題という最悪な環境だ。

というか何故か草が生えているのだが気のせいだろうか……おまけにカビ臭い。

『……………教室を間違えてないか？ただの廃墟であろっ』

『そうだな、いくらなんでもこんな場所が教室であるはずがない』

「相変わらず遅刻だけは回避しとるのう。明久、おはようなのじ

「や」

「あ、秀吉おはよう」

少女に酷似した姿の明久の男の友人、木下秀吉が話しかけてきて明久も挨拶を

きつちりと返している。

ちなみに明久は秀吉をキチンと男としてみている……理由は知り合いに似たような

人物があり、説教をされ続けていたからである。

知り合いというかエルキドウの事であるが。

「…………おはよう」

「おはよう康太…………カメラ構えてもないから」

カメラを構えている少年の名前は土屋康太…………ほとんど喋る事が無い少年である。

とある理由から妙な渾名を獲得している。

それはさておき、康太がカメラを構えている最大の理由が…………英雄の撮影である。

以前、需要がかなりある明久を撮影した際に写り込んでいた幽霊のようなものに

疑問を抱き、明久に尋ねたところ、神話の英雄達であることを知らされ、その内の

1人の女性（と勘違いされているエルキドウの事）をしつかり撮影しようとする躍起に

なっている少年である。

なお、本来ならカメラ如きでは撮影不可能なのだが、ギルガメッシュ曰く、何故か

宝具の域にまで到達している撮影技術の影響であるらしい。

そんな馬鹿なと思ったけど、英雄には割と技術宝具の持ち主が多いらしい。

実際、家で留守番している一人が技術宝具を持っていたのが例として上がる。

……ムツツリーニ、一体何者なんだ。

「いつものメンバーみたいじゃの」

「……………えーっと」

秀吉の若干嬉しそうな（友情的な意味で）言葉に明久が言葉に詰まる。

明久の視界の外で教室内にいる唯一の女子生徒がなにやらガッツポーズを

行なっているのだが、それも哀れにしか思えない。

何故ならば

「ちよつと、通してもらえませんか？」

「先生が来る時間のようじゃの」

「ん？吉井君はこのクラスでは無いでしょう」

別のクラスであるからだ
止した。

理解した瞬間、教室の時が静

表情が完全に硬直している。

人間は、信じられないことが起きると思考を放棄する生き物である。

「じゃ、じゃあ……Eクラスに行くから（逃げるのも戦略のうち）

「

この後の惨劇に備えて、明久は逃走した。
というか逃走せざるを得なかった。

*

「遅れましたー」

「Fクラスの教室を見に行っただけだろうから不問にしておこう。
他にも似たような理由で遅れた方が多いからな」

明久の遅刻に対して男性教師は罰則を与えることはなかった。
というよりも同じような境遇の生徒が複数いたので与えなかったのが
正しいのだが。

「さて、皆が揃ったということでまずは私の名から紹介しておく。
本日から1年間、君たちの担任をつとめることになった言峰綺ことみねぎ
礼だ。れい

カウンセリングの担当なのだが、くじ引きで引いてしまったの
でな。

担当教科はないが何か悩みがあるのであれば相談に来るがいい」

『……相談しに行った日には傷を決りそうな担任だね』

他人の苦悩する様を愉悦としそうな類と見抜いた英霊達はそれでも警戒は、

しなかった……相談に向かわなければ必要以上に接触することは無いと

理解しているためだ。

「では、1年間過ごす上での仲間達の自己紹介でも行なっていたらどう。

名前の紹介だけでも許可はしておくが……出席番号1番」

「はい!!」

かなり元気よく立ち上がった男子生徒を見て明久は運動会系の部活でもやって

いるのだろうか?と推測しつつ、自己紹介を若干スルーしながらもクラスの構成を

しっかりと目に焼き付けていた。

覗いたときに居た割合的にFクラスに男子が多かったせいなのか、少し女子生徒の

割合が多い気がする。

……明久の自己紹介の順番は吉井よしという苗字のため最後の方になるのだ。

『むお、今度はサッカー部……ちと待て、部活動生徒が多くないか?』

『確かに、今十人ほど終わったところですけど全員体育会系の

部活に所属している人ばかりだ」

『……もしや帰宅部は馬鹿^{アキヒサ}だけではないだろうか？』

『部活にいれこんでいるために点数が低いのか……む？』

英霊達の言うとおりで、実は明久も断片的に聞いては居るのだが……今のところ

全ての生徒が何らかの部活動に所属しているのだ。

それも……体育会系ばかりに、あまりの場違いに明久は若干部活に所属していない

生徒が居ないことを祈り始めていた。

「中林に関しては代表だから自己紹介は最後にするべきだろう、次だ」

「はい！」

返事がいい生徒ばかり、偶に冗談を交えて自己紹介を行う生徒もいるのだが、

基本的に真面目一辺倒で熱い性格の持ち主ばかりである。

ここだけ見れば、試験召喚戦争も積極的に戦ってくれそうではあるのだが。

「三上^{みかみ} 美子^{よしこ}です、所属している部活はテニス部です」

また運動部の生徒だった。

というか、ま行まで来ているのだが、結局全員が運動部員という恐ろしい状況。

このクラスは体育会系で構成されているだけなのだろうか？

偶然、テストの成績で所属になっているだけなのだろうが。

「
です、所属部活は格闘書道部です」

どんな部活だよ！！？

明久の前の生徒がよくわからない部活の名前を言った。

これだけだと文科系なのか体育会系なのかわからないのだが、体格を見る限り

体育会系の部活であるのだろうと予測される。

「あ、吉井明久です……………帰宅部でしかないです」

『余は征服王イスカandal！！世界征服部に所属しておる！！！！！！』

『聞こえてないから大声で言っても意味ないよ。というか物騒な部活だね』

明久の自己紹介の後に妙な自己紹介みたいなものが展開されていたのだが……

教師以外に気がついたものはいないようだった。

というよりも言峰綺礼教諭は確実に英霊達に気がついていました。

「こほん、クラス代表である中林宏美よ。
なかばやしひろみ

全員に共通して言えるかもしれないけど、試召戦争には興味がないわよね」

《《《無し！設備も特に異論はないし部活に打ち込む青春に意義

がある！』』』

「なん……だと……」

明久は体育会系というものを若干嘗めていたようであり、まさか試験召喚戦争に

興味を持たずに「そんなことより部活やろっぜ！」なノリに持ち込む思考だとは

認識できていなかったのである。

戦争に参加したかった明久ではあるのだが、どうやら戦う事が出来ないようだ。

「ふむ、確かにそういう面も学生生活の醍醐味ではあるのだが、一応教師として

言っておこう……せめて一度はこちらから出向いて戦うことを心がける」

教師も教師で特に戦うことを考えていないようだ というか、それによって

悩んでいる明久の苦悩の顔で楽しんでいる節があるのは気のせいだろうか？

『あー………いかんのう、これなら0点でFクラスに所属していた方が

何倍もマシだったのう』

『おや？このクラスに向かってくる気配があるよ？』

＊

「Fクラス代表の白虎^{びゃっこ} 討魔^{とつま}だ……諸君らに聞きたい。

吉井、明久が我らよりも上位のクラスにいるようだが……許せるか？」

《《《許せん！女子の比率が多いところに行きやがって！！》》》

（明久とて、努力はしたのだと思うのじゃが）

歓声が上がる中、秀吉と雄二、土屋と姫路だけは若干、他の者とは態度が

違っていた。

雄二はクラス代表になりそこねた事と、目の前にいるクラス代表となった男の事を

見てなにやら考え込んでおり、土屋は姫路のスカートの中を覗こうと必死に

畳に頬を押しつけている。

秀吉は友人である明久と一緒にのクラスになれなかった事に若干落ち込んでいるが、

素直に努力を重ねたであろう事を賞賛していた。

「吉井、許さないわよ。ウチを裏切るなんて」

（島田が目のハイライトが消えて怖いのが！？）

裏切るも何も、来年も一緒のクラスになろうといった約束などは交わしていない。

それに、明久とてFクラスにはいり、全てのクラスを打倒して底辺クラスでも

やりようによつては頂点に登り詰めることが出来るんだという建前かつ

征服しつくすという本音があつたのである。

そういう意味では決して裏切りなどおこしていない、ただ単にめぐり合わせが

悪かつただけである。

「ケホ」

「姫路、大丈夫かの？」

「ちょ、ちよつとホコリがキツイだけです」

他のFクラス生徒は意外にもこのクラスに適應しているのだが、体の調子が

不調である姫路には厳しいものがある。

というか厳しい以外のなものでもない。

「さて、代表直々に行ってもいいが、近藤ついてこい。早速宣戦布告だ」

＊

「吉井、このクラスだったのか」

「誰？」

『虫酸がはしる面だな、銀髪め』

『なるほど、最大の誤算は彼奴か……何故わざとFクラスにおさまる

マネを行なったのか？理解が出来ないが』

ギルガメッシュが代表であろう男子生徒を睨みつけていた。

当然ながら、威圧感は無意識のうちに感じ取れてはいるようだが、確実に声は届いていないだろう。

ヘラクレスも本来であればFクラスではない筈の成績の持ち主がいることに

退出するだろう生徒の計算を覆した張本人だと推測する。

ちなみにFクラスだと理解した理由は、先ほど覗いたときに教室内に居た

Fクラス生徒の姿も見えていたからである。

「ほう、Fクラス代表がわざわざ何の用かね？まだHR中なのだが」

言峰教諭がもつともな事を言っているのだが、まさか教師らしいことを言うとは

思ってもみなかった面々が多少驚いていた。

「……（なんで外道神父がいるんだよ！？）……いや、ただ単に事実確認をと思つてね……後は任せたぞ近藤」

「……了解した……我々Fクラスは本日午後にEクラスに対して宣戦を布告させてもらうー！」

《《……は？》》

「俺だつて本当は挑みたくないんだけどさ……俺より劣る“観察処分者”の明久が上の設備に居るなんて我慢ならないんだよ。」

勝ち目もあるしな……じゃ、そういうことで」

返事を待つことなく、Fクラス代表と近藤はFクラスの教室へと向かっていった。

返事を待つ必要がないのは下位クラスからの宣戦布告が断れるものではなかったためである。

「………上等じゃない、仲間を馬鹿にされて黙ってられるもんですか」

《《そつだそつだ！吉井は我らがクラスの一員！それに全体的に宣戦布告を

したのだから、叩き伏せても文句は言われぬ！！》》

「え——？」

『仲間想いのクラスメイトで結構なものだ』

急に戦争に対して意気揚々と一致団結し出したクラスメイトに明久はまたしても

体育会系のノリを嘗めていたことを思い知らされる。

というか、原因となった明久を責めるならまだしもかばい、代わりに激怒する事にもあまり慣れていない。

『ふむ、略奪は出来ぬようだが……戦争か。』

慣れるためにはちょうど良かったではないか』

確かになれるには丁度いいかもしれないのだが……勝ったら勝ったで悲惨な事になりそうではある。

Fクラスの設備をあれ以上下げるのは非常に心苦しい。

雄二やあの代表はまだしも友人たちを苦境に立たせるのは明久には本意ではない。

複雑な気持ちのまま、明久はお昼まで淡々と授業を受け続けるだけだった。

第二話：いきなり宣戦布告された？（後書き）

表立っている転生者の中で人間として壊れた思考が数人だけいます。

……ぶっちゃけひとりはこの代表者の事ですけど。

残りの表立って出てくる転生者は試験召喚戦争を楽しみにして、前線に出張っているだけです

ではまた次回（〇・・〇）／

第三話：明久の実力の一端（前書き）

だから他の話を進めると自分に小一時間問い詰め

今回、オリジナル設定がちょいと出ましたけど詳細はまた後で

今回、メインヒロインがようやくちょっとだけ登場。

第三話：明久の実力の一端

「すみません、吉井明久という生徒はまだここにいらっしやいますか？」

《え？はい！！？います！いますけど！！？》

聞き覚えのある声と共にクラスメイトの絶叫が聞こえてきた。

クラスメイトとの友好を深めようと机をつき合わせて弁当を広げている最中に。

偶にオカズ交換しており、そのせいでオカズがほとんどが別のものになって

いるのはご愛嬌といったところだろう……満足してもらえるのなら本望である。

『おや、この声は』

『自分の人気の高さを自覚しとらんのか、アヤツめ』

『あの者は人気を気にしていないのだろう……ただ一人しか見ていないからな』

「あれ？貴嶺さん？言峰先生なら既に自分の部屋に籠ってるはずだけだ」

「いや、父に用があるわけじゃないんだ。というか先ほど名指したのだが」

そうしながら教室の中を観察しつつ、明久とその周囲に存在する英

霊達を確認し、

明久の席へと向かっていった。

道は開き、視線が言峰と呼ばれた人物に集中している。

言峰は明久の近くに立ち、視線が交わってからここに來た最初の要件を告げる。

「吉井、今日の放課後父が“觀察処分者”への依頼を消化して欲しいそうです」

「へ？あー……うん、わざわざありがとう」

「いえ、大した手間では無いですから……」

そう言ってから貴嶺は一礼してから立ち去っていく。

彼女の名前は言峰貴嶺、ことみね たかね明久のクラスの担任である言峰教諭の一人娘で、

学年での人気はある種、霧島翔子よりは劣るが高い方の少女だ。

本来であれば霧島を上回るはずなのだが、父親のアレさ加減の影響で逆に

畏怖の感情が先行しており、彼女と付き合うには外道カウンセラーと戦わなくては

ならないという事から、付き合うではなく眺めるだけが良しという事が暗黙の

了解となっている……そのような経緯と少女の名前から「高嶺の華」として

扱われているのだ……もちろん、一部勢力を除いて親しげに話しかけていても

嫉妬心より先に哀れみの心が先行する有様である。

「ね、ねえ吉井君。貴嶺さんとは親しいの？」

「え？中林代表「代表は抜いていいわよ」中林さん……えっと、ほとんど仕事に

ついてを言伝されてて話しかけてくるだけだよ？」

女子は貴嶺の態度に何かを感じ取っていた……明久は性質上そういう事に愚鈍で

仕方ないとして男子すらも一切気がついていないのだが、同じ女子……それも

対象は別としても恋愛感情を持っている者は気配で感じ取れるのだ。スキル能力にすれば恋愛察知：EXランクは獲得できるだろう。逆に明久は恋愛鈍感：EXに分類される。

「それがどうしたの？」

「いや、まあ……（確かにアプローチしてないみたいだし、この反応は当然か）

ちよつと気になっただけよ、うん」

ただ、公言していないものの明らかに娘を溺愛している言峰教諭が何故、娘の恋路を

平気で応援しているのが気になったのだが、人の好き嫌いは他人が判断しては

いいものではないため、深く考えることはなかった。

「後、そういえば“観察処分者”ってどういう意味合いを持つのか？戦力分析の為に聞いておきたかったんだけど」

『そういう事はもっと早くに聞くべきだろうに』

今頃聞いてきた中林に対して大将としての自覚があんまりないのじゃないか、と

イスカンドルは注意するのだが、当然その声は届くはずもない。とはいえ、聞くという事だけは評価しておいた。

「えーっと、在り来りにいえば雑用係かな？召喚獣と感覚を少しだけ接続して、

先生達から言い渡される召喚獣の力でようやく可能な雑用の行使を行う為の

称号だよ」

「へー……ん？ということは吉井君は何度も操作したことがあるってこと？」

「あー……ほとんど毎日……夏休みも冬休みも春休みも雑用を任されてたし、

その回数分は操作していたよ」

苦笑しながら若干遠い目をしていた明久に気がつくことなく、中林は冷静に

戦力の分析を行っていた。

召喚獣というのは扱いが難しく、1年間学んでようやく単調ではあるのだが、

それなりに戦わせることが可能となる。

だが、それは学び操作した時間があまり無いからで、明久のように一年の間、

ほぼみっちり訓練（雑用ではあるが）を積んだのであれば話は別となる。

「まあ、デメリットでダメージの一部がフィードバックしてくる

けど……

あ、後メリットは腕輪能力が400点以上じゃなくても使えることかな？」

「……決めた。吉井君は最前線で扱うのが吉ね」

「はい？」

ちなみに観察処分者は毎年自己申告制で行われる……が、その名前から立候補する者が一切出てこず（変えればよかったのに）、明久が最初の犠牲者として立候補したのである。

二年次の試験召喚戦争において、自らの学力では活躍の可能性が激減すると

思った明久が、操作技術習得のために被験者となった。

もつとも、雑用を引き受けるといった行為の報酬として腕輪能力の点数免除は

明久的にもおいしい誤算だった。

が、その分扱き使われたので、プラスマイナス0と見るべきだろう。

「まあ、いいけどね（戦争の練習にはもってこいだし）」

『出るの誰にする？』

『初陣は余に譲ってくれぬか？』

『私は召喚点数が高い故、遠慮しておこう』

『格下相手に我が出る必要などない』

英霊達はなにやら相談会を行っていた。

明久の腕輪能力が関係しているのだが、これは実際に戦う時に明かされるだろう。

ギルガメッシュはやる気なしであり、イスカンドルはやる気満々、エルキドゥと

ヘラクレスは自身のスペックの高さから遠慮中である。

「それにしても……何か目の敵にしてる人が多いのはなんでなんだろう？」

先程のFクラス代表の目を思い出し、他にも上級生に睨まれた覚えがある明久は

特に理由が思い浮かばず、頭を捻っていた。

少なくとも明久には面識も直接接触もないはずである。

『そういうのは放っておいていいよ』

『ああ、そういえばあの上級生の雑種はわざわざ贗作者の姿フェイカーをしているのだったな……己が姿を借り物で代用するなど阿呆にも程がある。

あれならまだ、贗作者フェイカーの方が好ましい』

『今年入学してきた子の中にも同じようなのが居るらしいよね……
ギルガメッシュ
親友の姿を盗んだマヌケとか』

新入生の様子を観察した事のあるエルキドゥが見つけた人物の一人に非常に腹を立てていた。

思い出し怒りを発動中なのである。

（温厚なエルキドウが毒を吐いてる――！！！？）

『あー、無理ないのう……ギルガメッシュの事に関しては、非常に沸点が低いのだよ、コイツは』

とにもかかわらず戦争の先陣を取ることが決定づけられ、明久は複雑な感情を

押し込むようにして戦いに挑むこととした。

考えてみれば、Fクラスとなって設備入れ替えを行おうと画策していたから、

友人が居るからといって手心を加えていい理由では無いし、流石にあれ以上の

ランクダウンは机や椅子だけだろうからという自分に納得をいかせる理由で

押し込めた……過去には味方だったが、今回は敵という間柄なのだ。

それに坂本雄二とはこういう形で向かいあうのも一興だと、

明久は

戦意を上げ、戦いに臨むことにした。

*

「……吉井クロス」……」

「いきなりなんなの?!?!?」

戦端が開かれようとする少し前、明久は学年主任の高橋教諭の立会の下で
相対している時に妙な殺気を受けていた。

『えーっと……多分、あれじゃない? 貴嶺さんと話したとかそういう情報で
激昂してるんじゃないかな?』

「吉井、アンタをを殺すわ」

「男子全員の殺気より濃いよ?!?!?」

『あー………うん、諦める。もう無理』

Fクラス女子生徒である島田も明久に敵意を向けていた。
恨まれる理由が理解できない明久は訳が分からず、島田の気持ちを察している

エルキドウも島田の態度にあきれ果てて(一年の頃は頑張ってたが、弁明は
もう諦めた……いくら温厚でも無理との事)何も言わない。

「明久………」

「雄二、こんな形で「俺はお前の幸せを破壊する」

無駄にいい笑顔で何言ってるんだ、お前はやっぱり最低の親友だ!?!?!」

『最低でも親友なんだ……僕とギルガメッシュとは違う友情の形かな?』

『そうだ、やはり友情の確認とは殺伐としてなければならぬ』

エルキドゥの意見を盛り込むと、明久がエルキドゥのポジションとなる。

雄二がギルガメッシュになるのだが……意外と一致しているかもしれない。

ただし、ギルガメッシュとエルキドゥの方が仲がいいかもしれないが……

後どうでもいいかもしれないが、お前らの友情感を押し付けるな。

こっちの方は島田と違ってエルキドゥも若干態度が良好的……理由は明久も

キチンと反撃して対応しているので、どこかずれた感覚で友情を

謳歌しているのだろうと予測して……男子と女子とで反応が違いすぎるのは

おそらく気のせいである。

「では、これより今年度初、第一回試験召喚戦争を開始します!はじめ!」

《《Eクラス・吉井明久に日本史で挑ませてもらう!》》

「おい馬鹿!日本史は」

「受けて立ちます!」

成績が良い明久の事を想定し、雄二が慌てて得意科目で挑みかかる

うとする

生徒を制しようとしたが、既に手遅れの段階だ。

他のEクラスの面々を手で制して、明久は先陣を切る。

日本史の担当教師がフィールドを展開し、そのフィールドにFクラス生徒

数名の召喚獣が浮かび上がっていく。

「「「「^{サモン}召喚獣召喚！」「」「」」」

Fクラス×5：平均64点

点数に見合った武具が出現し、生徒自身をデフォルメした召喚獣達が明久に

向かい合う……Fクラスだけあって点数は低いレベルだ。

初戦としては物足りないと感じつつも、明久は前運動を行うかのよう

に戦意を
滾らせる。

「^{サモン}召喚獣召喚！」「

Eクラス：吉井明久：日本史：234点

明久の点数が表示されると同時にFクラスの男子生徒達は戦慄の表情を浮かべる。

明久が自分より馬鹿だと勝手に思い込んでいた上に上位クラスだという事を

忘れたためによる恐れである。

「おい！400点超えてないのに何で腕輪が

」

「観察処分者特権だよ

サモン・サーヴァント
英霊よ来たれ！ライダー！！」

Eクラス：吉井明久：日本史：234点

104点

「あれ？攻撃が来ないぞ……ただのはったり

」

「驚かせやがって、まあいい！点数が減ったなら」

Fクラス生徒も雄二ですらも油断していたのである、腕輪は400点以上の

限定特典だからただのはったりで演出するものだという事を。

そもそも観察処分者の要項は立候補しない限り配布されないので、内容が把握

されていないのである。

生きているものは明久・学園長以外は明久の腕輪の能力を把握していない。

Eクラス：ライダー：日本史：520点

『がっはっは！心地よい空気だのう。余が征服王！イスカンドル也！』

Eクラス：ライダー

イスカンドル：日本史：520点

「せつかく隠したのに何してるのさ！！？」

「て！鉄人の声が！！？」

「急に召喚獣が出てきたぞ！！？」

「つーか、なんだよあの点数！！？」

戦場となるフィールドに現れた存在に、全ての生徒が硬直してしまった。

デフォルメの存在ではあるものの他の召喚獣よりも明らかに巨体であり、体の大きだけでなく、ほかの部分でも色々とデカイ召喚獣に度肝を抜かれたのだ。

一部Eクラス生徒は興奮している上にイスカンドルの名前を唱和していた。

『では行くぞ明久よ！余の動きに合わせよ！！』

「あー、もうこの際いいや！任せて！」

「あ、しま」

「おい！どうすんだよ人数多くてもこの点数差じゃ」

イスカンドルの操作技術に関してだが、これはイスカンドル自身が召喚フィールドに立っている扱いである為……言うまでもない。

しっかりと相手の動きを読み取り剣使い程ではないにせよ、常人より上の卓越した

動きで相手を仕留めていく。

イスカンドルがスパタを振るうと、点数によるパワーの違いで一体の召喚獣が

あえなく戦死し、その隙をつこうとした他の召喚獣は明久から攻撃を受けて

あっけなく散った。

そして慌ててどうにか逃れた相手も明久の召喚獣に切り込まれてギリギリで

避けたが、後ろからイスカンドルに攻撃され、あえなく戦死した。

わずか数秒でFクラス生徒とはいえ、五体の召喚獣を撃滅したのである。

『さて、余の声のそっくりさんの出番だのう』

このあとに起こる事態を思いながら召喚フィールドが消え、同時に

明久の召喚獣も

イスカンドル自身もその場から消え去った。

同時に何者かがいつの間にかFクラス生徒の背後に立っていたが。

「戦死者は補習だ」

「「いや、だ……助けてくれ！拷問なんて受けたくない！！？」」

「拷問ではない、ただ単に【尊敬する人物が二宮金次郎】となるように教育するだけだ」

『洗脳だ！？拷問よりタチが悪いよ！？』

Fクラス生徒の悲鳴をBGMにして西村教諭は補習室へと入っていった。

その途端、悲鳴がピタリと止んだのが不気味だ。

「「「は！今の吉井相手なら点数が下がってるから倒せる……」」
吉井を相手に日本史で挑みます！」」

「おい馬鹿！下がってないのには絶対理由が」

Fクラス×5：日本史：平均45点

Eクラス：吉井明久：日本史：101点

明久自身が戦うために動いたことによりダメージこそないが点数は減少している。

それでも明久は他のEクラス生徒の援護を呼ぶことはしなかった。
何故ならば。

『着眼点が良いだろうが……もうちつと考えたほうがよかったの
う』

「「「「「何—————!!?!」」」」」

Eクラス：イスカンドル：日本史：518点

その必要がなかったからである。

「僕はまだ戻してない」

『更に5名様ご案内といったところだのう』

操作に慣れているか否かの差により、五体の召喚獣もあつという間に
けちらされた。

操作技術が高い明久と、ほぼ完全に自分自身で戦っているイスカン

ダルが

相手では低い点数能力の召喚獣など1桁単位の人数では相手にならない。

「一旦、引き上げる！！情報がなさすぎた！」

戦闘そのものに物足りなさを覚えつつもイスカンドルは戦場特有の空気に

戦意が上昇しつつあった。

雄二は前線を維持できないと知るやいなや退却を選択した。

あの点数にぶつけるのはFクラスでは2人しか居ないと歯噛みしつつ。

第三話：明久の実力の一端（後書き）

まだ本気じゃない征服王さん……………Fate/Zeroを知つていれば

究極奥義は何か分かるはずですが、普通は出せませんのでご安心を。

また次回（〇・・〇）／……………の前に設定を上げますけどね

設定リンク：E（前書き）

大分隠されてはいますが設定集。

設定ランク：E

オリジナルキャラ（転生者除く）

名前：言峰 ことみね 貴嶺 たかね

性別：女性

血液型：B型

趣味：天体観測、舞台鑑賞、食べ歩き

特技：中国拳法

家族：言峰綺礼

好きなもの・人：明久・父親・友人・食事
嫌いなもの・人：いじめ・カエル

特徴

外見は、銀色に輝く美しく艶やかな前髪ぱつん・ウェービーロングヘアと

抜群のプロポーション……正直に言えば「アイドル スター2」に登場する

四 貴音と同じ外見と言った方が遥かに早い。

口調は時代がかった物言いが特徴、目上の人物を呼ぶ時には「殿下」、

目下の者には親しい仲の場合を除き必ずフルネームで呼びかける。勘が鋭く怪しい気配を察する能力を持つ、元の人物は妖怪、幽霊が苦手だが、

この小説ではものともしていない。

父親から教わった拳法が特技であり、父親からはその年代ではほぼ敵なしとまで

言われているらしい。

Aクラスに所属しており、成績自体はAクラスのほぼ中間地点。

ちなみに、非転生者であり、転生者の願望（綺礼の存在）の余波で誕生したキャラ。
メインヒロイン。

召喚獣

アイドル スター2の貴音をデフォルトにし、何故か女性なのに神父服を纏っている……シスター服じゃないのかと落胆する者が多いらしい。

武装は刀……および肉弾戦というちょっとだけ変わっている召喚獣。

腕輪能力

unknown

名前：言峰^{ことみね} 綺礼^{きれい}

性別：男性

血液型：B型

趣味：自己の限界への探求、カウンセリングという名の何か

特技：中国拳法

家族：言峰貴嶺

好きなもの・人：娘・中華料理・カウンセリングという名の何か
嫌いなもの・人：特になし

特徴

あえて言おう！ただの言峰綺礼その人である。

ただし、黒幕などではなく腹黒カウンセラーというだけの話である。

妻とは死別しており、キッチンと死を悼み悲しんだ分、元の人物よりは

人間的にはまともであるのだが、それでも腹黒のS部分のような性格は

健在であり、カウンセリングも最終的には解決してくれるが、その間は

傷を抉りに決するという末恐ろしい人物である。

AクラスとFクラスは担任が固定ではあるのだが、それ以外はくじ引きで

クラス担任が決まるため（オリジナル設定）にEクラスの担任となった。

一応、鉄人に次ぐ点数を持ち合わせている上に知られてはいないが全科目で

フィールドを展開できるようになっている。

ちなみにある転生者が望んで作上げられた人物。

吉井明久

- ・原作との相違点はある理由で金持ちどころが大富豪。

- ・姫路には好意を抱いておらず、対象が変更。

- ・明久の自宅でのみ実体化可能な英霊に憑かれている（守護霊状態ではあるが）

理由は主人公至上主義かつ無双を希望してる転生者のせいであ

る（特典効果）

・守護霊達は試験召喚戦争に明久の点数消費で介入可能（クラスの割り振りあり）

・原作開始時期にはFクラス代表を狙える点数を取るほどの成績を持っている。

・霧島翔子とは親友の関係かつ同盟関係

・雄二とは一喧嘩する間柄（親友）

主にエルキドウとギルガメッシュのせいだが、原作通りっぽい

・雄二の幸せ（ただし翔子関係除く）を否定する

坂本雄二

・翔子に対して若干素直になっているが、やっぱり若干ツン状態。

・クラス代表にはなれなかった。

・明久とは一喧嘩する間柄（親友）

・明久の幸せを否定する（あれ？原作通り？）

霧島翔子

・明久とは親友の間柄、恋愛感情は無い。

- ・貴嶺を応援している。

姫路瑞希

- ・好意を抱いている対象が違う。

- ・後は原作性能（！？）

土屋康太

- ・撮影技術が宝具の域にまで届いており、カメラなどに収まらない英霊を

撮影可能となっている。

点数目安・振り分け当初（総合科目）

・Fクラス	0	1	2	2	2	点
・Eクラス	1	2	5	4	点	1
					3	2
					8	点
・Dクラス	1	3	3	0	点	1
					5	6
					5	点
・Cクラス	1	5	7	0	点	1
					7	1
					4	点
・Bクラス	1	7	2	0	点	2
					1	6
					2	点
・Aクラス	2	2	4	0	点	

明久の召喚獣の腕輪能力：召喚

観察処分者の称号により、本来400点以上の点数でなければ扱えない

腕輪能力を点数関係なしに扱えるようになる。

明久の点数は主に維持や点数消費による能力の発動として使われるだけであり、点数自体は後ほど記される性能で動く。

召喚に必要な消費点数は単体科目であれば単体科目の合計値、総合科目であれば総合科目の合計値の4分の1で済むのだが、維持コストで

明久の点数が徐々に減少していく。

なお、フィールドが消滅した後も残り続け（消費無し）再び戦うときには

そのまま再登場する。

大体3分でそれぞれの合計値（宝具除く）の10分の1の点数分の明久の

テストの点数が消費される。

明久の点数が尽きたときには消滅するが、召喚コストの点数は明久に戻る。

なお、倍加の+については消費なしで任意のタイミングで実行可能。

能力基礎

普通の試験召喚獣は幸運・魔力以外および宝具Ⅱ武器で平均的に振り分け。

宝具の値は明久が扱う事が可能な点数であり消費分の点数で宝具発動に

使用する事が可能。

魔力は存在維持の為に扱えるが0になると死亡扱いとなる。

幸運の値は高ければ高いほど宝具使用の為に消費割合4分の1減が発生し易く、

具体的な確率はEで6%・Dで12%・Cで18%・Bで24%・Aで30%。

擬似クラス：ライダー

真名：イスカンドル

マケドニアの霸王。豪放磊落を地で行く、髭の似合う偉丈夫だが、言動や表情にどこか愛嬌もある、魅力ある人物。

他者を省みない暴君ではありながら、その欲望が結果的に民を幸せにする

奔放な「征服王」。

赤い髪と赤い髭に大柄な体躯で色々とデカイ男である。

試験召喚獣時にもデカさは健在であり、他の召喚獣よりも少し抜きん出ている。

召喚点数

単体科目：130点

総合科目：1300点

維持

単体科目：42点/3分

総合科目：420点/3分

能力基礎

筋力：B

単体科目：80

総合科目：800

耐久：A

単体科目：100

総合科目：1000

敏捷：C

単体科目：60

総合科目：600

魔力：B

単体科目：80

総合科目：800

幸運：A+

単体科目：100

総合科目：1000

宝具：A++

単体科目：100

総合科目：1000

クラス別スキル

対魔力：D

Dクラスの平均レベルまでの魔法的攻撃手段を無効化できる。
でも、ほとんど役に立たない

騎乗：A+

騎乗の才能。獣であるのならば、竜種を除く神獣、幻獣まで乗りこなせる。

つまり試験召喚獣にも理論上は乗れるけど宝具に乗ったほうが効率良し。

保有スキル

カリスマ：A

大軍団を指揮する天性の才能。

Aランクは人間として獲得しうる最高クラスの人望。

共に戦う試験召喚獣の能力を五割増する為（自身は無効）、ある意味反則。

点数で騙された人はご愁傷さま（高いやつと組んだら恐ろしい）

軍略：B

多人数を動員した戦場における戦術的直感力。自らの対軍宝具の行使や、

逆に相手の対軍宝具に対処する場合に有利な補正が与えられる。ただし、召喚フィールド内で多数対多数でないと真価を発揮しない。

神性：C

明確な証拠こそ無いが、ゼウス神の息子であると伝えられる。

当たり前だが試験召喚戦争では使用不可と思いきや、実は

相手召喚獣が若干怯む……ポケンでいう麻痺状態。

ただし硬直確率は18%

宝具

unknown

unknown

擬似クラス：unknown

真名：ギルガメッシュ

バビロニアの英雄王。遙か昔世界の全てを有した「人類最古の英雄」。

性格は傲岸不遜、自らを唯一無二の王と称してはばからない。

黄金の髪に真紅の瞳が特徴的。

エルキドゥが居るためなのか、若干温和な性格（hollo状態とも言える）

召喚点数

unknown

維持（実質無し）

unknown

能力基礎

筋力：unknown

耐久：unknown

敏捷：unknown

魔力：unknown

幸運：unknown

宝具：unknown

クラス別スキル

黄金律：A

人生でどれだけ金銭がつきまとうかという宿命を示す。

大富豪でもやっていける金ピカぶり。戦争中は関係ないが私生活に便利。

unknown

unknown

保有スキル

unknown

unknown

unknown

宝具

unknown

unknown

擬似クラス：unknown

真名：エルキドゥ

黄金の王ギルガメッシュと認め合った唯一無二の友であり、自らも

ギルガメッシュに勝るとも劣らない強大な力を持つ。簡素な服装に、

男とも女とも取れる柔和な風貌で、その精緻さは人間というより人形に近い。

長い淡い緑色の髪が特徴的で比較的温和な性格だが怒ると怖い。

召喚点数

unknown

維持

unknown

能力基礎

筋力：unknown

耐久：unknown

敏捷：unknown

魔力：unknown

幸運：unknown

宝具：unknown

クラス別スキル

unknown

保有スキル

unknown

unknown

unknown

unknown

unknown

宝具

unknown

unknown

擬似クラス：unknown

真名：ヘラクレス

ギリシャ神話最大の大英雄。

「魔術師」以外の「剣士」「槍使い」「騎乗兵」「暗殺者」「弓兵」「狂戦士」

の6つの全クラスに当てはまるほどの武芸百般を極めた武人である。

……圧倒的なまでの巨体、恐ろしい貌で威圧だけで召喚獣を屠れそうなお方。

根は紳士的であり、明久にかなり甘い性格。

召喚点数

unknown

維持（実質無し）

unknown

能力基礎

筋力：unknown

耐久：unknown

敏捷：unknown

魔力：unknown

幸運：unknown

宝具：unknown

クラススキル

unknown

unknown

保有スキル

unknown

unknown

unknown

宝具

unknown

unknown

unknown

二の打ち要らずの拳法家

unknown

「忠義の騎士」として名高い騎士

unknown

天照大神の表情の一つ

第四話：僅かな葛藤（前書き）

巻き巻き展開！

ちよつと戦争は小休止中での会話を書きました。

秀吉をカッコ良くする為のフラグ点灯

第四話：僅かな葛藤

「お疲れ様吉井、いきなり単独で10人撃退なんて凄い戦果じゃない」

「……吉井！吉井！……」

「……イスカンドル！イスカンドル！イスカンドル！……」

無双をやらかした存在の明久に対し、賞賛の意を送る三上と体育会系のノリで

賞賛し続ける他のEクラス生徒達。

その事に若干照れくさくなりつつも、明久はしっかりと呼吸を整える。

勝った時こそ油断が生じる、戦場において圧倒的でない限り慢心はしては

ならない……イスカンドルとギルガメッシュの教えである。

ただ、ギルガメッシュに慢心すると言われるのは、知り合いが見たら確実に

お前が言つなと総ツツコミを入れるだろう。

「あんまり長い間戦い続けられないけど……コストがあるし」

「……まあ、あんだだけ強力な召喚獣を召喚できるならデメリットはあるわよね。」

召喚に点数を結構消費してたし」

それでも消費した以上の存在が召喚されたのだが、という言葉は呑み込んだ。

おそらく明久のいう長い間戦えないのところで何かを感じつつたからかも

しれない……まあ、コストという言葉である程度は察したかもしれないが。

「ところで召喚獣しゃべってなかったか？」

「あ、私も気になってただけど」

「えーっと、普通の召喚じゃないからってことで」

過去のトラウマから英霊の事は信用してもらえないと思っているので明久は、
腕輪の能力の一環だということでごまかしておいた。

「このまま前線は維持しておくとして……せつかくだから皆も参加しようよ」

「そうだな、次は俺も参加しよう」

「いざとなれば吉井がなんとかしてくれそうだしな」

頼られるのは嬉しいのだが、あまり依存され続けても困る。

いくら点数が高い召喚獣を保有していても日本史・世界史などの歴史系科目以外で

挑まればかなり厳しいことになるからだ。

（なるべく日本史か世界史で戦わないと）

『まあ、少し低い教科でもかなりの点数の敵じゃない限りは圧倒

できるけど。

警戒するのは土屋、雄二あたりかな？今のところは、後は代表も一応は

警戒対象だね』

『だが、おそらくまだ隠し玉が存在していそうだ』

『心眼か……狂犬でない貴様のソレならば信用できるであろう』

明久が戦える科目を考えており、エルキドゥ・ヘラクレス・ギルガメッシュが
今見えていた敵に対して戦力の分析を開始する。

『だいたい見当は付くがのう……明久の繰り上がりがあったいうことは

明久よりも点数の高かった生徒が倒れたといったところだ』

『読めたぞ、奴らが勝ち目があると言っていたのはこの為か』

『教えておくのか？下手うてばひっくり返す可能性があるぞ』

『日本史、世界史以外だと僕達は出づらいからね……ちょっと厄介かな』

英霊達は集めて整理していた情報によって、誰がFクラスの切り札として居るかを

看破していた……振り分け試験の時に倒れたという生徒は十中八九体の弱さも

成績の良さと共に有名になっているある一人の生徒の事だろう。

とはいえそこが有名になっていたとしてもFクラスに居るとは思われない筈だ。

『情報の伝達は大事であるし、可能性としてだけ伝えておこうかの』

『だが……明久に伝えられるのか？』

（伝えるって何が？）

英霊達は押し黙ってしまった。

唯一ギルガメッシュだけが気にしていないのではあるが、エルキドウの表情を見て

伝えない方向で固めていた。

優しい明久では姫路瑞希の事を知ってしまえば完全に戦えなくなる。

あの最低の環境において、体の弱い者がどういう末路をたどるのかを想像しやすいからだ。

だが、そうは言っても今のうちに覚悟だけでも決めさせなければならぬ。

勝利するということは、他の他者を踏み潰すということ。

『これから、言うことを伝達させるようにしておいて』

「（うん、いいけど）室井君、今から言うことを代表に伝えておいて」

「わかった、任せておけ！」

＊

「明久があそこまでやるとは」

「というか代表！観察処分者はバカの称号じゃなかったの！！？」

「おいおい、どうしたんだよ（何が起きてるんだ？コイツらしくねえぞ？）」

雄二と島田、その他数名の生徒が一旦Ｆクラスに退却していた。

追い打ちはなさそうで一安心しつつも、雄二は冷静に情報の整理をもう一度する

べきであると判断して先程の召喚獣の特性を判断して、去年までの明久の

苦手科目を土屋に頼んで見直し始める。

島田は島田で代表に対して話が違うと詰め寄っている。

ともに行動していた者も同様だ。

というかＦクラスでない地点で自分達よりも上の得点であることは

把握しておいてもよかったのだが、そこまで頭が回っていたのは前線部隊では

雄二一人だけである。

白虎は偽装していた点数を直す為に回復試験を受けており、近くに

は姫路も居る。

「能力は違っているかもしれないが……500点クラスの召喚獣が現れた。」

もつとも、これはそいつの得意科目で戦わなければ回避できる」

「5……500ておい!？」

「Aクラス超えてるじゃねーか!？どういうことだよEクラスなんだろ!？」

雄二の分析以前に、そのような高得点の召喚獣が出現したという事態に焦りが出ているのである。

単科目で対抗できる者も居るには居るのだが、科目違いでないと存在しない。

また、拮抗しそうな者もクラス代表であるため、敗北＝完全敗北になる。

「明久の得意科目が変わってなけりゃ、日本史と世界史を攻めるのは愚策だ。」

とは言っても、半端な点数で向かっててもあの操作技術を見る限り厳しいな。

確実に向こうが多数というアドバンテージを得たから余計に」

「そんなもの高得点の俺と姫路の二人で巻き返せるだろうが……」

お前らの仕事は

時間稼ぎなんだぞ?」

そう言いながらも、白虎はテストの問題を解き進めて枚数を重ね始

めている。

が、姫路の方は順調とは言い難い……理由はこのクラス環境のせいだ。

ホコリやカビの影響で呼吸器官にダメージを負いながらの試験であるため、

実力を十全に発揮できていないのである。

（何、チンタラやってんだこの女……原作だと病弱設定だが明らかにものとも

してない描写の方が多かったし……仮病に決まってるだろうが、そこまで

弱々しい猫被っていたいのかよ）

「雄二よ、姫路を途中中断して前線に出すことはできないかの？」

「……そうだな、どのみち明久には代表をぶつけないと倒せそうにないし……」

時間稼ぎなら短時間でも高得点を取れているだろう姫路を前線に出してから

相手の人数を減らしてもらっても良し、あの召喚獣を相手取らせるもよし、か。

どっちみち戦死の方が姫路にはいいかもしれないな」

勉強をそこまで嫌っていない姫路であれば補習そのものは苦痛ではないだろうし、

何よりも部屋が教室のものよりも清潔であるのだ。

秀吉の意を汲んだ雄二が姫路出撃を進言しようと代表を見るが。

「却下だ、出撃するなら十分な時間獲得した点数でのみしか認めない」

戦線を決めるのはクラス代表だけ。
故に、姫路の参戦を決めるのもクラス代表である白虎だけ。
姫路の顔色をかくしつつも体調を崩し始めている事に気がついてい
る秀吉は、
この状況に歯を食いしばった。

*

「報告完了してきたぞ、代表からはそのまま前線は現場の判断で
任せるそうだ」

「了解、このまま出てきた敵を迎撃できる待ち伏せ戦法を教室の
出入口を

睨みつつ待機して」

華やかさに欠ける戦法ではあるものの、誰も明久の判断に不平不満
を漏らさない。

数が減った以上総攻撃を仕掛けても良いのだろうが、より確実に負
傷しても本陣に

即座に撤退できる陣形構築の方が有利である。

……もつとも、発案は明久のものではなく、英霊達のものではある

のだが。

『こつちには人数というアドバンテージがあるし、いざ補給試験で点数上昇を

試みていたとしても、たった十数分で頭が良くなるなんぞ無い』

『日本史や世界史以外で挑まれても二人の人物を除けば対処は可能だしね……』

あ、保健体育も危険だ』

見えない事を利用してあちこちで情報収集していたエルキドウ。

ギルガメツシュはそこまでする気が起きず面倒臭がり、ヘラクレスもイスカンドルも戦略的優位に立つために情報収集だけは欠かさなかった。

ただし、事前にテストの問題用紙を見ていたりすることはしなかった。

そこまでは流石に反則であり良心が痛むだろうから。

家にいて留守を守護してる他の者も情報収集には協力的だった。

「でも、吉井は大丈夫なのか？随分と顔色が悪いぞ？」

「ははは、ちょっと……ね」

姫路の事を聞いた明久は、戦争の目的の事を忘れて戦意が少しだけ減少している。

ここにきて明久の優しさと言うなの甘さがアダとなっているのだ。

いま敵に出てこれれば間違いなく操作の為の集中が非常に甘くなってしまう

可能性が大である。

明久自身、クラス代表となつて最初の地点では全てのクラスを交渉で三ヶ月停止を行ふ事とAクラスと入れ替えた後に他のクラスに改修を承諾させる事を条件として考えていた。

噂でかなり酷い設備だということをあらかじめ聞いておいたので、学年全員からの要望ということで直訴すれば改善は可能だろうという予測で。

が、今の明久は全体の方針を決めれるクラス代表の位置にいない。よつて、どうにかして回避させるような方向にも持っていけないのである。

『……………明久よ、一つ打開策を授けてやろう』

(え?)

『文句が言われないほどに勝ち抜け……………我が言えるのはそれだけよ』

そう言つてギルガメツシュは押し黙つた。

理解した面々はもう少し言葉を重ねるよと言いたかったが、ギルガメツシュから

説明がもはやないことを悟ると、説明するために明久に言葉をかけた。

『簡単な話、ほぼ明久だけで勝利を収めれば明久の要求ぐらいは代表も

無碍にしないって事だよ』

『つまり設備のワンランクダウン以外の悔しさを押し付ける要求でも和平交渉で

押し付けてやれば十分といったところだ』

(……そうだね……ここで負けたら僕だけじゃなくて今は仲間であるクラスの

皆にも迷惑をかけちゃうわけだし)

明久の実力を話だけで評価し、実際に功績を収めて前線での司令官として任じた

中林代表や、明久への侮蔑に対して一致団結で怒ってくれた面々を思い出し、

明久は表情を引き締め、頬を軽く叩いていた。

(でも、今は待ちに徹するべきだ……焦って功績を収めるために行動しても

うまくいかないことが多いから)

『ま、王道的な戦法の方が弱点が少ないしね』

奇策を用いても、うまく運用できなければ効果は激減するし、操作になれていない内は、待ち伏せて迎撃するほうが理にかなっている。

待ちに徹するということは意外と精神力を削るのだが、見張りも交代でしっかりと

立てているし、何よりも多少ではあるが距離はある。

すぐさま応援に入ることも可能ではあるのだ……だから明久は見張り組ではなく

待機して集中力を休めていざという時に備えているのだ。

『厄介なのは雄二の戦術と……ちょっと未知数な敵の代表』

『姫路瑞希も点数的には油断をしてはならぬ相手だしのう』

警戒には気配を察知できるエルキドウ戦士としての感が鋭いヘラクレスがいる。

たかだか数時間程度で英霊たる存在が参るはずが無いので、待ち伏せとしての陣は

盤石だ……体育会系のクラスメイト達も前線ではリーダーを一任されている

明久のいう事には実績を見せられたこともあり、しっかりと従っている。

この地点では勝率は非常に高いのである。

*

「待つだけってのも暇ね」

「でも、吉井が言うには操作に慣れてないうちはこれが吉だそうですし」

Eクラス本陣で代表である中林が少しだけ暇そうにしていた。

教室の中央で窓や明久達が陣取っている扉とは逆方向を警戒しつつ居座っているだけ。

非常に簡単すぎるお仕事である。

「全体的に点数で凌駕してますし、後は数でも優位に立ってますね」

前線には10名のみで、残り40の人間が本陣で待機。

点数も消費してないうえに圧倒的な戦力差による優位性により、思いつき

暇してた。

明久任せにした上にしっかりと実績ももぎ取ったそうなので、戦争に関しては

ほぼ明久に一任しているのである。

そうして、明久が提示した作戦は先程の布陣の説明だけであり、特別なことは

一切なかったのである。

「にしても可能性として姫路さんが居る、ねえ……確かに体の弱さは有名だし、

実際に言われなければ考えもつかない人物よね」

「勝算があるといったというセリフもその事を考慮すれば有り得ますしね」

実際、明久にはそこまでの戦術眼はなく、英霊達による反則補正ではあるのだが、

知覚することも見ることも不可能な者達にはそれが明久の実力であるとか

映らない。

明久自身の实力は抑えているが、本来は、Eクラス中盤の位置の点数と

操作技術のみ……それでもある程度破格で有る事に間違いはない。

「というかワンランク下げると姫路さんの体調がますますヤバイのよね。」

かと言って負けるわけにはいかないしどうしたものか……」

「いつその事、吉井に結論を押し付けますか？戦争貢献者として」

「あー……多分、お人好しの類だろうし、ワンランクダウン以外に罰則でも

与えてそうよね。」

ま、吉井が決めたことなら文句は無いでしょうね……実際、流れを

作ったのは吉井なんだし」

クラス代表としての威厳は失墜しているわけではないが、吉井に比べたらおそらく

カリスマが大幅に違いすぎる。

明久自身には無いだろうが、守護霊となってる英霊達が一般人に畏怖させるような

神性やらカリスマやら保持している結果だ。

「皆、とりあえず吉井がもっと活躍して、成果を示したら交渉に
関して

一任するけどいいかしら？」

《《《異議無し！》》》

思いの外姫路の名が影響しているのだが、前線に居る明久達には聞こえていなかった。

かくして後は明久自身の活躍によってFクラスの裁量が決まる事になった。

第四話：僅かな葛藤（後書き）

明久のカリスマはきっと今の地点ではEランク
ひとつのクラスをまとめるには多分十分ですね。

では、また次回（〇・〇・〇）／

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4422ba/>

バカとテストと英霊達

2012年1月14日20時58分発行